見よ 月が後を追う

丸山健二

私と共に疾駆する者は誰か

原発で精気を失った海辺の町。いわくつきのオートバイ。若者は送電線を辿って、都会へと出奔する——。光と闇の絶妙のコントラスト。疾走感溢れる文体。究極の小説世界を実現した、待望の書下ろし新作。

文藝春秋　定価1800円(本体1748円)

が後を追う

丸山健二

文藝春秋

見よ　月が後を追う

平成五年五月十五日　第一刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者　丸山健二

発行者　阿部達児

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二十三
郵便番号一〇二
電話東京（〇三）三二六五―二三一一（大代表）

印刷所　精興社

製本所　矢嶋製本

ISBN4-16-313920-6　Printed in Japan

© KENJI MARUYAMA 1993

万一、乱丁落丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

見よ　月が後を追う

装画　千住　博
「風の夢」
装丁　中島かほる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

☆

どろどろという海鳴りを、夢現に聞く、
それは哀調を帯びていながら、どこかしら残忍な響きをも併せ持っている、
もしかすると、性懲りもなく蘇生してしまった私の前途を祝福する、おそらく天地（あめつち）の初め
のときにも轟いたであろう、新紀元を押し開く重低音なのかもしれない。

私を魂ごとすっぽりと覆う、咬々（こうこう）たる望月の夜、
気怠（けだる）い忘我の気配をどこまでも拡散する、真夏の茫々たる大海原、
そこかしこに蔓延（はびこ）っている、一生を棒に振り兼ねない、投げ遣りな静観主義。

海沿いの、地図に載る価値があるかどうかも疑わしい田舎町、
この土地を金縛りにしている静寂の遣り切れなさときたらどうだ、
ここに比べたら、谷懐に抱かれた寒村のほうがまだ活気に溢れている。

わが身の不運を嘆じる生者たちの遣る瀬ない含み声が、単調な波音に掻き消されている、
野道に安置してある濡れ仏がぶつくさ呟いているのは、きっと離郷者の数に違いない。

心ならずも死の淵から引き揚げられたという思いが、急速に高まっている、
そんな私に向かって、形而下の生々しい現象の数々が次々に押し寄せてくる。

辺り一帯に乱雑に打ち棄てられているのは、逆運に苦しむ阻害者の切ない思い、
あるいは、心ない言葉に傷つきながらも、結局は隷従してしまう愚者の長過ぎる吐息、
あるいはまた、ろくでもない病魔に魅入られた正直者の骨と肉とを容赦なく蝕む追懐の情。

玲瓏(れいろう)たる月の光が多種多様な物象を遍(あまね)く照らして、退屈な沈思黙考を保っている、
天際を限る海の果てまで均等に散らばっている星々が、すげない素振りで瞬(またた)いている、
ふしだらな女や小心翼々とした男が溺れてしまいそうなじめじめした闇が、まばらに散らばる電灯の無駄骨の輝きを呑み込んでいる。

町にたったひとつしかなく、暗紅色の光を放ちつづける、なくもがなのネオンサイン、
しかし、その下に群れ集う若者の姿はない、
酒を酌み交し、万丈の気を吐き、たゆとう心を奮い起こし、如何(いかん)ともし難い現状に正面切って異を立て、勃々(ぼつぼつ)たる英気を自覚しながら唯一無二の正義を標榜するような、それほど気の利いた奴はどこにもいそうにない。

生まれ落ちると同時にこの世を肯定してしまう、末頼もしい嬰児の呱々(ここ)の声、
もとよりの覚悟で激しく交接する、所帯持ち同士の男と女の毒々しいよがり声、
莞爾(かんじ)として死んでゆく者が別れの挨拶の意味を込めて指を弾く、ぱちんという音、
夜陰に乗じて法に違(たが)う行為をやってのけようとする荒くれ者の、ひたひたという足音。

そうした類いの声や音は、よそではいざ知らず、ここではまったく聞かれない。

深々と更け渡る夜のなかにあって命の震動音を発しているのは、原子力発電所のみだ、
こんな片田舎でともあれ権勢を誇って生き生きとしているのは、低濃縮ウランだけだ。

稼動してまもない、とかく風評のある、元凶の典型となったそいつ、
人命など物の数ではないといわんばかりに、一意専心事に当たるそいつ、
桁外れの破壊力を秘めながら、普段は目立たない汚染を延々と繰り返すそいつ。

そいつは暗々のうちに練られた計画に従って、高過ぎる利益を生み出している、
そいつは進取的な素振りを見せながら、旧弊家どもの手先として働いている、
そいつは昼夜を問わず制御棒をぶちのめす機会を虎視眈々(たんたん)と狙っている。

およそ人が造り出した物で自然の摂理に逆らわない物はない、と原子力発電所は嘯く、
たしかに……この私にしてからがそうだ。

鉄やゴム、それに少々のガラスといった材料から成る私も決して例外ではない、
原子炉の比ではないにしても、私もまた、やはりそれなりの毒を撒き散らす者だ、
これまで私が受けてきた非難にしても、謂のない非難というわけではない。

私は気化させたガソリンを連続的に爆発させて、燃えかすと爆音を世間に叩きつける、
私は前後ふたつの車輪を意のままに回転させて、世に満つくだらない不文律を蹴散らす、
私は無意味な高速がもたらすがき染みた示威行為によって、進退極まった中年男を悲しみ
のどん底から救い、陶然と酔わせる。

私にしがみついて疾駆する者は、自ずと他律的に振舞うことをやめるのだ、
私と共にある者は、何事にも怯まず、飯代に事欠く立場さえすっかり忘れてしまう、
私といっしょに雲を霞と遁走する者は、私がその潜在意識とやらを充分に汲み取って、ひ
と思いに死なせてやろう、
むろん独りで死なせはしない。

たとえ仲間に疎外され、肉親にさえも見棄てられた乗り手であろうと、この私が最後の最後まで付き合って、きっちりと黄泉路を辿ってやろう、
少なくとも、解剖実験にされるまだらの山羊や、処刑場へ連行される老いた囚人のような気分にさせたりはしないつもりだ、
心身の爽快が醒めやらぬうちに、また、生を高めるほどに死が迫るという矛盾に逢着しないうちに、この私が一切の問題にけりをつけてやろう、
別にどうということもない、緩やかなカーブに差し掛かったところで人生は湯玉のように弾け、蒸発し、それでおしまいだ。

いつ死んでも心残りはない、とこの前の乗り手は呟いた、
まさしくその通りだった、
彼は分相応に生きながらも、遣れるだけのことは遣った、
改悟に値する前非があれこれとあったあの男は、惨めな日々を幾つもくぐり抜けた。

そして、どう間違っても事故には結びつきそうにないカーブの光景が、彼にとってこの世の見納めとなった、
享年四十九歳……いい潮時だったかもしれない。

あの乗り手は、他人の不幸を異常に喜ぶ、無知蒙昧な三万人が住む美しい高原の町で生まれ、女々しくも真実の愛とやらを渇望して死んでいった、
夭折を惜しむ声は、たぶんひとつも聞かれなかっただろう。

そう、あれはたしか、暑気と涼気が鮮やかに入れ替って黒い鳥が塒でひとしきり騒ぎ立てる、日暮れ時のことだった、
死処を得たと直感した刹那、いろいろあったにせよ終始一貫自力で生きたといえる彼は、
ふと歓びの声を洩らした。

彼が発作的に呼び寄せた死は、手心を加えてはくれなかった、
私にはどうすることもできなかった、
スロットルは全開のままで、ハンドルは左右いずれの側へも切られず、ブレーキにも一切触れられなかった、
爛熟期の社会に些か疲れていた彼は、煩累を逃れようと、思うさま宙を飛んだ、
飛んで行く私たちを待ち構えていたのは、道路脇の、この先何百年でも生きてしまいそうな年寄り連中の声高な談笑で埋まった、ちっぽけな神社だった、
御影石の鳥居に叩きつけられた乗り手は、石畳に駄目押しをされた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

彼の五体は砕けるだけ砕け、潰れるだけ潰れただろう、
よしんば現場に飛び切り腕のいい外科医が用意万端調えて待機していたとしても、彼の命を救うことはまず不可能だったろう、
境内にたむろしていたちっとも圭角が取れていない老人たちは、長生きし過ぎた者特有の卑しい声を張りあげて、突然空から降ってきた惨劇を大いに嗤ったことだろう。

後世の語り草になるほどではなかったにしても、しかしその死は完全無欠なはずだった、
思うに、彼は凜乎たる気概を持って死に臨んだのではないだろうか、
梲の上がらなかった一生も、もしかするとあの一瞬に帳消しになったかもしれない。

だが、私は死ねなかった、
あれから如何なる経過を辿ったのか知る由もないが——、いや、切れ切れの記憶はある——、
再生した私が今ここにこうして間違いなく存在している、
それも、間に合せの部品や巧みな複製のフレームの応用で生き返ったのではない、
大戦後の混乱期に造られた当時のままの姿で甦ったのだ、
純正部品でないのは、バッテリーとタイヤ、プラグとヘッドランプの豆電球くらいだろう、
ほかはすっかり元通りだ。

宿運が尽きてしまったのはあの乗り手であって、この私ではない、
いい心持ちだ、
語り古された往年の名車にでもなったみたいな気分だ。

新鮮なオイルとハイオクの燃料が私を確実に正気づかせてゆく、
ときおり私をひどく狂おしい気持ちにさせるのは、おそらく死んだ乗り手の愛の飢渇に苦しむ魂の名残りだろう、
私の岩のようにごつい水冷エンジンをいっぱいに満たしているのは、地方紙の支局で働く記者が生前に血反吐や痰のようにして吐いた言葉の断片なのかもしれない、
そうだとしても詮ないことだが、私の意志は誰のものでもない。

不抜な意志の力を武器に、私はもう一度この世を生き直してみせる、
これから私は私自身に成り澄まして、まだ見ぬ次の乗り手といっしょに、今度こそ正真正銘の、景仰する師を持たない《動く者》になってやる、
野天の下で日月の運行と共に移動し、湧き出る喜怒を洗いざらいぶちまけながら、ひた走りに走って知らない土地ばかりを通過し、今度こそ生の証しを立ててやる、
そして高遠な哲学を差し置き、この世に恐るるもの無し、と壮語してやる。

今度の乗り手は、よもや骨董品扱いするつもりで私を手に入れたわけではあるまい、
それが証拠に、私は今、家の外に、玄関の脇にさりげなく置かれている。

この家の造りは一風変っている、
木造の三階建ての古い家が、天体の排外的な輝きを背景にして、夜や海と同系色に塗装し
直されてぴかぴかに磨き込まれた私の表面に、くっきりと映し出されている。

これは中央から見放された地方でしばしば見掛ける、ありきたりな世襲財産ではない、
さりとて如何にも格式張った豪邸というのでもない、
よくよく見ると、三階に思えたところは実は楼台だ。

楼台のいやらしく反り返った八角形の屋根を、八本の太い柱が支えている、
壁はなく、灯りもないが、そこにだけ得もいわれぬ清爽の気が漲(みなぎ)っている、
あとは周囲の家とだいたい同じで、富や安楽から遠く懸け離れている、
ほかの家と同様、低い山の中腹にあって、大海原の方角に向いている。

家そのものは無情だが、楼台だけは私のように有情だ。

日毎夜毎海と町と霊魂不滅説とを鳥瞰している楼台、
こやつの歳はどう見ても私の数倍は下るまい、
どう見ても不変の真理のひとつやふたつくらいはつかんでいてもおかしくない年齢だ。

生と死についてまずまずの一家言を持ち、存在と無を比較考量し、動く者に対する動かざる者について日に幾度も観想する輩(やから)、
前代の遺物でありながら、今世を澆季(ぎょうき)と観ずる手合い、
どうせろくなもんじゃない。

ためしに私は楼台に呼び掛け、問い掛けてみる、
だいぶ経ってから短い言葉が返ってくる、
何というつっけんどんな挨拶だ、
新参者だと思って端(はな)から見下しているのだろう、
それとも、移動可能な私に年甲斐もなく修羅を燃やしているのかもしれない、
四六時中、年柄年中、四方八方を眺めるばかりで、一センチも動けないこんな奴が、まるで終極の目的でも持っているかのように、灯台か何かのように偉そうに振舞っている、
大した奴ではなさそうだ。

こう見えても私は、標高二千メートルの雪の山頂に立ったことがある、
こう見えても私は、二百メートルの高さの電波塔の周りを休まずに百周したことがある、
おまえみたいなこけ威し野郎の成れの果てに侮られる筋合いはない。

おまえという奴は、自己の所信に安んじ、僻見を固持し、大衆を啓蒙したがる輩だ、
そのくせ迷信家で、のべつ妄言を吐き、真っ当な発言を圧殺したがる者だ、
お高くとまるんじゃない、この田舎者が。

だが、こやつは緘黙して語らない、
こやつは胸を張って辺りを睥睨している、
こやつの尖った頭の先は、神秘主義の源である暗黒星雲の方を指し示している。

私は怒鳴りつけてやる、
雷火で焼失してから吠え面をかくなよ！
ここではおまえなんかより原子力発電所のドームのほうがずっと目立っているぞ！
わめきながら私は、その程度のことしか言えない己れに気がつき、気遅れしている己れや、
むきになり過ぎている己れに、はっと気がつく。

せっかく生き返ったというのに、私はくさくさしている、
今回もまた、愚にもつかない死のための退屈な生をだらだらとくぐり抜けるのだろうか、
しかし、どうなるかは偏に乗り手次第だ。

新しい乗り手を早く見てみたい、
果たしてどんな奴だろうか、
もしもこの楼台なんぞとよく似た奴だとしたら、がっかりだ、
もしもメカニズムについてのご託を並べるだけの青二才だったらどうしよう、
もしも私が振り絞る前進の力を自身の力と錯覚してしまうような、風姿が秀でているだけの、おめでたい奴だったらどうしよう。

私は逃避のための玩具ではない、
私は逼塞のための道具ではない。

私が求めてやまないのは、めくるめく慮外な出来事、
さもなければ、途轍もなく荒々しい不測の事態、
塵埃を縫って進み、星影を追ってひた走る、私はそんなオートバイでありたいのだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com